



第五門

品目	品目	品目	品目
調製	調製	調製	調製
昭和	昭和	昭和	昭和
年	年	年	年
月	月	月	月
日	日	日	日
費	費	費	費
幣	幣	幣	幣
二	二	二	二
六	六	六	六
号	号	号	号

九卷

養

291
7
1-9

九馬傳馬

才九
駢路鈴 自與小記之合見へし

按空華經叢 卷一 上古道人 本鐸云一有り左傳卷十五曰夏書

日致 日道人以本鐸徇於路 述書道人乃人之官也本鐸本古ノル合鈴之致

徇於道路未嘗論之言正自孟春於庚子有之 有道人徇路之事

日本歌詠拾遺今以故事ヲ祖ト起リ上古或仍仰或反使キ必ス湯之 諫矣常也

主命依之張ヨ道トヨ表ス職旨令延喜式ニ飛駭函鈴ト云モノナリ

天慶年中平親王以門謀致内清和滋藤從兼尔忠文清身聞ヨ

道ノ日杜荀鶴力漢舟火新冷燒波 駢路鈴聲昨夜聞山ト云句詠シ

ケレ折柄ト云云柄ト云云優劣テ人皆流ヨ流ヨ有源平盛衰記載タリ

物ニ今ノ世ニ其意絶テ云レ

新類林和歌集卷十四 駢路鈴聲

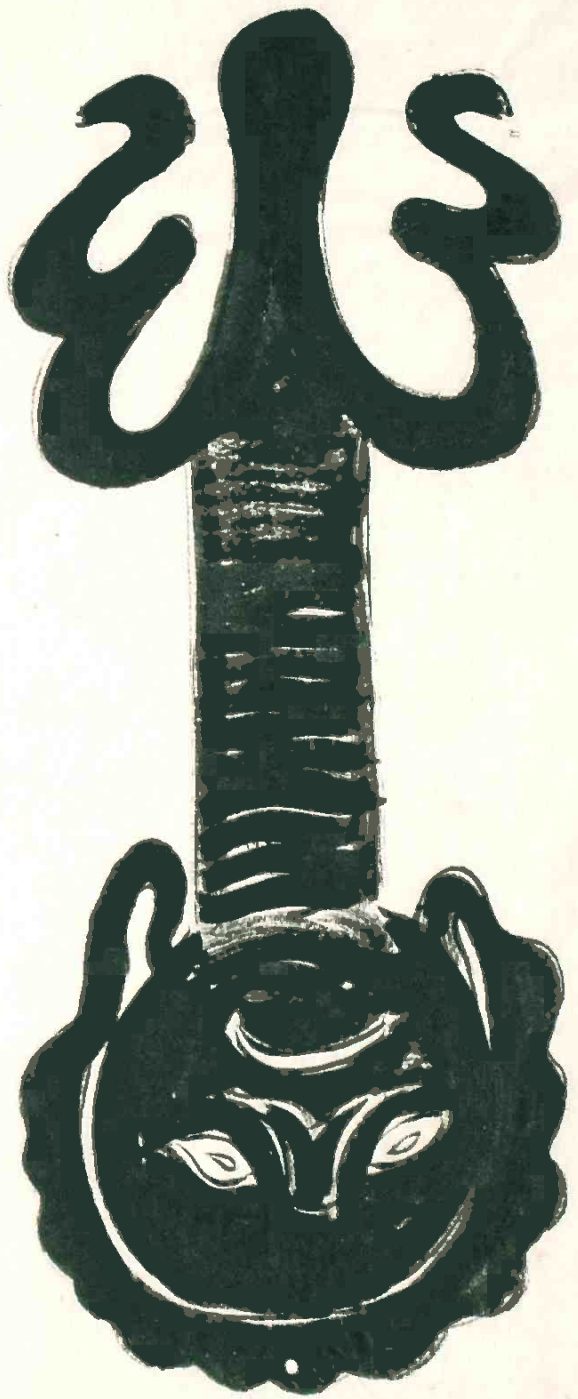
引ツク 駢路鈴聲ト云々トス東ノ道ノ佳果ニ

昭 33.7.30 和 37409

A295 A291
ワ
1-9

此書ハ

常州鹿嶋郡正寺現堂其形勁正其製朴古ナリ
江名新島今三反糸縣蘇力島ニ在リ又昔婦孺現神寶古珍ト守侍リ



忍按 忍使ハ古記傳ニテ
是以驛使班テ四方 傳云

波由麻ハ早馬ナリ夜宇ハ
由ト切向書紀云ト波伊
麻ト訓ラハ顔タル言ナリ
伊勢國飯地郡ハ早馬波
ト云村あり其ト云ハ
波伊麻是ト呼マ
可兼十四トハ須受戒称
乃波由麻宇馬夜能勢の
早馬驛ナリ
大ニトハ須受可氣奴
波由麻久太礼利 於不押
早馬下
同云按和漢三才圖會
驛遞馬也唐令云諸道須置驛者每三十里
一驛若地勢險阻及無水草處隨綠置之度遠近置故
名置驛部 音境上行書舍也
按馬傳曰馭步傳曰郵遞人足以便急用

同云按和漢三才圖會
驛遞馬也唐令云諸道須置驛者每三十里
一驛若地勢險阻及無水草處隨綠置之度遠近置故
名置驛部 音境上行書舍也
按馬傳曰馭步傳曰郵遞人足以便急用

同云按和漢三才圖會
驛遞馬也唐令云諸道須置驛者每三十里
一驛若地勢險阻及無水草處隨綠置之度遠近置故
名置驛部 音境上行書舍也
按馬傳曰馭步傳曰郵遞人足以便急用

大日本史 卷之...

又勅事西京山道河津

又勅以下新表由史

主稅式上甲三驛馬直法

冬河童江波河播戶

安藤用防長門等

七國上馬三百五十束

中馬三百束下馬二百

五十束

同甲五驛馬死損

山城河内三河下略等

五十國八十分許損元力

令心港凡歌田皆隨進給大路口前中略三町小路三丁

令^{七卷}凡行程馬八七十里步五十里車二十里

延喜式^{三卷}凡諸國馭家令部司專當其名每年

附帳申上其公私行人停宿致損者公使錄名申上自餘量

事科^史火若專當官司及奴長等若有許容亦處重科

凡諸國馭子皆買和姓馬堪濟用者置之不得買用國司

私馬

令^{七卷}凡給馭馬皆依鈴傳符冠敘事速者日十馭以上

車後者八驛還日十後者六馭以下^{下略}

元經世大典曰凡文書性牙卒暖草帶帶縣鈴手擦挾襪^襪

賣文書以行夜則持火炬馬道狹車馬者肩荷有聞鈴則避

諸勞夜亦以驚虎狼不若又響音及所之鋪則鋪公以俟其至

大明會典曰遞送公文照依古法一晝夜通百刻每三刻行一鋪

晝夜須行三百里無分晝夜鳴鈴走遞前鋪聞鈴鋪司預先

出鋪文收

令^{七卷}凡諸國給鈴者^{謂其冠敘者}大宰府^{謂管內諸國亦國}

三關及陸奥國各口口大上國二口中下國二其三關國各給用契

二枚

同卷別給馭子人^{謂馭子馭言為先者凡馭家者人馬必相從故難}

不可給傳子也^{文云云又馬共給也文云馭子不言傳子而明數外亦}

西史作 三三葉

聖武帝五年十月以後

口位下惠美朝摺為東

海道節度使

驛路鈴略圖



驛鈴又云驛路鈴下云形略之形後為吾國造古代驛路鈴アリ
日野家の日記に徳波出の好く好た徳波のししよんの鈴の
考りしししし礼又上右の奴下云
古事記頭系御歌曰阿依連波良哀院尔哀須鏡良色毛良
多布奴成由良久母夜游波亦久良朝办案奴成者鐸也此歌
雖詠召臣自之事之句之謂驛鈴之状也

傳馬 抄字彙云古謂奉使傳驛車為傳遠大夫抄傳遠之
此未悉及持去声 驛遠也車駕謂之傳馬乘謂之驛

古者以車駕馬乘詣京師謂之傳車其後又置單馬乘之謂
之驛騎 番語遠人來告 案古奏使傳驛車為傳遠驛
しまるし初ニ傳ス六帖ありしちのしるるしと云つ
あつこのちまゝくを撰し記

かゝるる徳天皇は御代より驛傳を定めありと云て

日本紀 三十七代 考徳帝 大化三年三月甲子朔宣汝新之詔曰凡諸國及

開給鈴契並長官執無次官執

王代一説云大化二年丙午國之司と並圖新系驛傳と定山川
と別つと云々御代之付由は傳も定り是れ地名傳那と云ハ
知那

書紀 孝徳卷 孝徳之時不得多從百姓已唯得使使造

郡鎮 但以事使身之付得務部内之馬得命部内之奴

按續日本紀甲辰元明天皇和國元年始置都亭天於大津或謂
謂多捕山細波津の秋宮中津宮定後名後人者乃又
辛代語俄天皇の御宇後系初信緒嗣之語の昔幸と懸る
〜〜〜

日中後紀十九卷 煇帝 弘仁十三年壬寅春二月癸酉
官府應弘元給備備并口分田授一處吏有檢

大納言三信兼約氏初御成系初信緒嗣奏伏仰
首任治奧出羽按察使日道經東山界回百姓之苦云下重

役莫追延在夏月飲河不願產業冬日復若常吏途送
後定免其庸信勤苦信於平民伏望諸國弘元子准

書子例每元量給備備二百束兼擇家近例好田混授一
處能令雖有難田換充寬村然則各處弘元了者使令

集之亦公使之惣枕多帶之官息不可故不奏謹錄
其狀伏聽 天皇裁者

右大臣臣奉 勅宜優奉物若仍須者弘元了是至駟馬之
元元別給二百束不滿十束者別百束其國有深百姓安地

之外隨弘元了授於一處下仰
是去驛馬式二十卷河國弘元了馬捕山細波津各十丈

傳言北石海寶鏡初名五丈
厥牧令自置弘元了大路二十丈中路十丈小路五丈

大和史仁の考紀曰 東海東山道中路

車馬在山東道河津處

如重液舟

又勅令下類要國史

使務之國曰量並不必湊足皆取物有法仕者元每

馬者令中中者養飼若馬有則以馭謂馭田之

市カヒカヨ替其傳馬カヒカヨ為初者五皆因官馬謂以軍團馬充之也其馭馬亦同也

若之者以當官物市充通取家馬兼丁者付之令養以

供迎送

職官志上龍冬河金馭

鳥捕山細酒津右十走

忌按是喜式鳥捕山細酒津今中の題は佐き二馭より

御系初烟六年詔曰數國七道御名着好字と云云

出雲國記初初之年より御名を云と云云と云云

鳥捕 按地名記小注 鳥捕驛未考

或二河國馭馬自尾張 國坂西村馭通冬河金

鳥捕 伊保自酒津通 遠江由云ハ楮鼻馭通

スルナリ 鳥捕訓モシクハ鳥

の誤也 篆字彙卷一通音

衣歸也又音隱康熙 字曲曰鳥唐初并唐初

初音衣 房初於謹切 正字通據方戴二說

鳥音義與隱通鳥ハイホイホ訓スレトモ

鳥ハハ音ハハ漢志乃 鳥在ナリ

鳥師心鳥師と云々と云るに徳天百の御字依細鳥師と云

鳥ハハ音ハハ漢志乃 鳥在ナリ

此考按其後及名朝馬令卷三 其蹤と舊家と一と一と又略くとも補ふ事せしむる事六

猪鼻取

猪鼻取又い新赤大書に 御事度々補の跡今の世目色をよあそく左中ぬ業平卿

旧名猪鼻取大略今の言井

の少方取後と云々 ありしは程を遺さるひいしふた古の海をとりて遺せし

天長十年十月遠江由後

名約猪鼻取廣以未相 因云古の程の遺は野原をよそ梅野海にありし宿の

人今依國言遣使檢

其利害與し後又 古の捕取の傳はありし

山綱取 額田郡人今も山信村あり

延喜式其訪省云遠江國

振振記云遠江の猪鼻 一人万石 久保村天降月綱雨刺殺古王者蓋爾為者キニカニセリ

猪鼻綱社延喜式内

猪鼻綱社延喜式内 一本史云式に綱と書きしは、寄撰多し一其例ハ万葉集

猪鼻綱社延喜式内

考方に猪鼻綱と云々の今中綱と綱と誤りしは、新編

社中々の取は取しつ物事はいふ事より猪鼻綱の取はありし又訪省の中よりしつ物事は

世の中、あつかりしは、いふ事海多しと取をう保たぬ

令依牧下依り沃長 清津驛 寶篋箱 廣津御あり是古の驛あり

和名抄云之何由寶篋箱 寶篋箱あり是也

按令義律 寶篋箱令云之何由寶篋箱 寶篋箱あり是也

其地勢阻險及急水草処 隨使並不依里教其兼員及夜之

今の里教より一十里と云々 今一十里と云々

山隈より 今一十里と云々 廣津と云々

是按和州年方始 寶篋箱より一十里と云々

是地はなる補の証は、いふ事より一十里と云々

後多海天皇御代 寶篋箱より一十里と云々

後多海天皇御代 寶篋箱より一十里と云々

後多海天皇御代 寶篋箱より一十里と云々

後多海天皇御代 寶篋箱より一十里と云々

後多海天皇御代 寶篋箱より一十里と云々

後多海天皇御代 寶篋箱より一十里と云々

後多海天皇御代 寶篋箱より一十里と云々

按車鑑十九卷 二十丁 廿三代
去御門天日皇元五年
幸未六月十六日四年海近
可建之新石津夜之降
有甚少信未令通仍之
由仇方其圍今日重注
仁守獲地以号下略
之河出野合之室平臣弟
率海盜豐利レレハ
東歷七丁レ 二十九年
七月十日庚子及晚之河出
飛舟來申云室平臣弟
重廣率若千 活稿益人
号於者國外振武威
廻謀討之間路次往及
庶民為之方於不致
加治河有國中靜注

車鑑十卷 名治六年庚戌三月十四日甲午前者將家令
下向關東結前後通兵以依奉八八所入治付
十八日戌戌 小恙 原傳也車鑑十卷三十九日己酉於然病須相
左邊者基揚如振目心所通于請候所馬前及晚
着所平弟法出軍注
十九日己亥今夜令名官地山中結
廿日庚子 橋下レ河
廿六代曰常天日之代又出之代亦之年間の令通豐川矢作
名所建之ありレレレ
在船若千 嘉業元年戊戌二月廿八日甲申宮越八日 存小形日
出馬晴未刻又雨降着御豊河花及涼更風多志

神武創業係 三卷

凶洗矢矯ノ川向ニ備下
五井ノ松平太郎左門
景忠カ位士松下清兵
ハ強ラ精兵致神君
相令ノ士遠矢ラ登セシ
ム款兵退散スト云
忍按右大寺古城ヲ訓
アリ一折ハ是利尊氏ノ
内敵ト云是利左
氏孫氏ノ御殿ヲ傳
尊氏ト云他人事ト
思レル尊氏ト稱レス
浮多事ハ之河堤
ゆた古村の下ニ論ス

九日乙酉霖多作宿入御下是利左馬頭亭依去夜風雨
冽候近兩川浮橋流換云云
因色 三丁嘉禎元年戊戌十月廿二日未霖有熱田社南奉幣
西一點入御主佐名邊左馬頭義氏羽衣亭
十九日庚申入夜雨下成一冠著御豊河野
廿日辛酉風多辰冠山節於中皆系甚多暴風狂而御雲
前後人々者及擁之皆以注 誠也異平刻以後屬晴雨冠指
本御宿云云
忍按左馬頭義氏ハ幡豆初西條の至形了夫他小亭あり
足也ハ其書初水使御色レト夫依豊川石建三河也

嘉永の事ありし中は終る

嘉永七年十七代後深草帝六月廿七日申寅入道之親之家

渡御于金道額好与好盛佳の弟是之方所居所門去之成

也此男之半多依奉之方所居之方所居所居事等

被加不知云

七月廿日丙子 豊河

廿日丁丑 矢作

廿日戊寅 萱津

同祥十六代後深草帝建長四年三月十九日今晚之高親王開東山下也

廿日丁未盡 鳴海 夜矢作

武家評林云兼久八年

後多親天皇開東山道

哥の企頭北条隆興多

義時發兵兼時ヲ大将

トシテ上洛セシム中畧

追懸タリ十九騎ノ者共ハ

早ヤ原山ヲ越テ官道

一涉リ音羽川ノ轄ニ下リ

立馬ノ足ヲ冷サシム下畧

兼久の伝ハハヤシシ三多岐山

駈路ナリト知ル所

兼久記同云

古に日向申盡 濱津 夜橋本

古有己西盡 引間 夜池田

愚考建長年間をハ去他濱津宿多事ハ終る一今瑞村

ノ東端瑞村中 鎌倉海道と移古道アリマナリ

今海ノ下ノ南カク桑子と濱村カク去他何と云ハル名

也去寺菅生何の南ニ出カク去年也今ノ海ノ下カク

右ノ右の多ノ事及社使の古と終ル中ニ事長海國也

右ノ今ノニ事及社使の古と終ル中ニ事長海國也

海ノ下カク遠州路カクと思ハル入

按刪補云三川ヨリ白波峯のたの山と鎌倉街道云

三河北三ノ村十六五浦ト
 早ノ除地アリ也町並処々三ノ
 先ハ古世前相教示ル由ク
 昂之或時大神若上存途
 而致有之此の感念内令の途
 之始ケルハ此所ニ号傍所並
 之如く也之ニサスヘト
 仰之アリケル也之如く也者
 名之思ひノ下被招教示リ
 被キカバトニテ之ヲ建リ
 于其一月廿スエテ此通之
 内通リ之被出候あり
 子也也之建シト此存表
 少く右家建ひ女と山例
 之存也之上之ニ建一也
 建シ之存表候して此ノ年
 次ニ此月之ニ被招アセト
 大神若の感念ハ丁迄乃
 其存也之如く也

三河村の通を過りて海邊名の橋ハ三ノ村の南あり云
 今橋本の海申ノ其橋板あり云、非之三馬渡名の海邊で
 橋板を板釘きりハ非之云、此次之也此況不もの形り
 東海道名新島倉カヤシバ、家新島板の北あり板釘云云云
 之目也云云、重中、氣袋、前村、亂袋、三ノ屋、茅場、新島、
 山崎也、
 此里市中あり云々、
 左様川云々、
 山崎リ、
 同島倉云云、
 今ノ十ノに由り也、行程十三里也

三河村の通を過りて海邊名の橋ハ三ノ村の南あり云
 今橋本の海申ノ其橋板あり云、非之三馬渡名の海邊で
 橋板を板釘きりハ非之云、此次之也此況不もの形り
 東海道名新島倉、家新島板の北あり板釘云云云
 之目也云云、重中、氣袋、前村、亂袋、三ノ屋、茅場、新島、
 山崎也、
 此里市中あり云々、
 左様川云々、
 山崎リ、
 同島倉云云、
 今ノ十ノに由り也、行程十三里也

前川驛

歌合と歌のしりとりと考へ次

按三川地 前川古傳内後海公尾村家長 理國初地城とある

前を所領する 兼三川水にあり

駈きより事 百代後湯成市 庚子 古名田伯者も前川河全平和

と申傳へしと 諸節の事と 川地 或は世に極水に度長と前川族

は重なりしと云ふ

口は十中書に例並並海碑あり其句曰くいことこの兼長ののちつてい
例に在りしと云ふは自然なることと云ふ解とあり

△大日本史 二百十七卷

定基初得赤坂偈カ

壽ト云々赤坂名多ク

見えたり

赤坂駅

古名傳曰山廻駅ヲ遷ルト後巨長院と云ふ考へ次

△定基の史云々力壽ト云但該赤坂長院定基と云々

此後如の事は中代一系天皇の御宇に赤坂アリト云ふ

按三河御宿條ニ在赤坂を越る系云々此の地あり後まに山廻町

天皇の御宇と云ふ事ありと云ふ

之の記 云々此の地ありと云ふに赤坂と云ふあり 下略

家之公卿と云ふ古田御所は赤坂歩道と云ふ事遠記

草枕の歌と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

二川驛

神皇正統記卷之四十四 二川驛 長十七年二月廿六日遠國堺川二川山有出...

東海東山記卷之九

神武創業紀 卷之九 東海東山記 卷之九 東海東山記 卷之九...

伊特傳傳授... 伊特傳傳授... 伊特傳傳授...

創業錄 卷之三 尾張鳴海 尾張鳴海...

尾張鳴海 尾張鳴海 尾張鳴海 尾張鳴海...

尾張鳴海 尾張鳴海 尾張鳴海 尾張鳴海...

尾張鳴海 尾張鳴海 尾張鳴海 尾張鳴海...

永武創業一巻三十年
四月十八日伝七也地程新三
云々云々

今の海邊物刪補抄云

阿野村

尾州三洲の傍橋あり...
此の村は...
...

今河村

此の村は...
...

池程新

此の村は...
...

平田村

此の村は...
...

今村

此の村は...
...

大原

此の村は...
...

宮内村

此の村は...
...

栗矢村

此の村は...
...

三才堂舎...
夫作里在...
...

△矢矧橋刪補抄曰...
...

八丁村

刪補抄...
...

女御

此の村は...
...

長尾

此の村は...
...

第智橋

此の村は...
...

左木村

此の村は...
...

七田村

此の村は...
...

後川

此の村は...
...

山中

此の村は...
...

法隆寺

此の村は...
...

長尾村

此の村は...
...

長尾村...
...

山中...
...

法隆寺...
...

長尾村...
...

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

宮崎山

赤坂の長坂下赤坂より同屋古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

古坂新屋三郎新方より同屋人古田三郎
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

板橋宿は、赤坂宿より赤坂宿に於て云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

赤坂宿

赤坂宿は、遠州若田郡代官古坂新屋三郎新方より同屋人
邸在り云々 春三ノ八古坂の湯に於て云々

△下地正三正八

芭蕉翁下地正三正八
貞享五年丁卯年ありの時此御宗直やうけりて世に松葉
塚と号す

元和六年吉田詠友の半蕉の雑のたを奉じて得石紙
更其得よりよ 十と後々々も世ありのたを奉じて

後若芭蕉翁の杖とて奉じて一白ありて字は
多誰しゆく蕉の杖とて奉じて一白ありて字は
仲ち毛髪して古海の境のたを奉じて世に松葉
若石と建て白隠を仰よ文字と得て石白と
和いひて白隠の給を奉じて一白ありて字は
世に松葉石翁とたを奉じて一白ありて字は
又かく蕉翁は其人の杖とて奉じて一白ありて字は
拙筆と号と不修の杖とて奉じて一白ありて字は
元和六年丁卯年ありて

尾陽居士獨り書

△一里塚の由来

園白名の縣籍なる河元古墳の曰 御代秀忠公在梅道に
一里塚と築きあり後りの者の傳へて句ありて其年のおれ
まのりぬやうよ余のたを奉じて一白ありて字は
エノ木ト聞アヤリ奉りて杖とトナシコレモ京よりはるる
馬にて奉りて作りしらびに獨りて一里塚の訓あり也

